

はじめに

少子高齢化の進行とともに、人口の都心回帰が活発化している。その一方で、マンション立地と新住民の増加は、水平型コミュニティの減少と、地域力の弱化という問題を内包している可能性がある。さらに、世帯の小規模化や世代間のコミュニケーション・ギャップなど、個人と地域のつながりが失われやすい状況の中で、暮らしの孤立化に拍車がかかっているのではないかと、いった

大学院生活科学研究科三浦研究室と大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所(筆者所属)による、少子高齢社会における都心居住の実態とあり方に関する合同調査研究プロジェクトの一環として、高田・神吉研究室が調査主体となつて実施したアンケート調査「大阪都心部に居住する子育て世帯・高齢者介護世帯の地域との関わりに関する調査」の結果を簡単に紹介した。調査を通し、地域資源を活かした参加の場づくりなどによって、ヒューマン・ネットワークの構築を支援し、暮らしの孤立化を防いでいくことの重要性を改めて認識することとなった。

弘本 由香里

written by Yukari Hiromoto

大阪・上町台地発
都心居住文化の創造へ
(第11話)

都心居住の主体を育む 地域資源データベースと地域ガバナンス

これからの暮らしをめぐる懸念に向き合ったとき、市場のサービスだけではカバーしきれない、メンタルな安全・安心を支えるヒューマン・ネットワークの必要性がリアルに浮かび上がってくる。とりわけ都心部では、流動性の高さや資源の集積という特徴を前提に、人と暮らしとまちをつなぐ場や仕組みを地域の中に組み込んでいく「コミュニケーションデザイン」が求められているのではないかと考えられる。

こうしたい思いのもとに、前回(第一〇話)は、京都大学大学院工学研究科高田・神吉研究室および大阪市立大学

現在、新たに子育て層として都心部に流入してきている層、あるいは医療・福祉施設の充実を求めて都心部に移り住んでくる高齢者層の多くは、地域におけるヒューマン・ネットワークの構築に必ずしも長けているとは言いがたい。地域資源を介して育まれるヒューマン・ネットワークの存在が、高齢者介護世帯や高齢者そのものの暮らしの孤立化を防ぎ、安心感や生活の質の向上に大きく寄与するものと考えると、地域資源との関わりが乏しいまま年を重ねることは、近い将来、生活上の大きなリスクにもつながりかねない。地域の有形無形の資源を使い

こなし、他者との関係を築き合うことのできる都心居住の主体を育てていく場や仕組みづくりが、将来への投資として不可欠と考えられるのである。

当連載第一話では、前述の子育て世帯・高齢者介護世帯へのアンケート調査でも改めて必要性を確認した、都心居住支援としての地域コミュニケーションデザインのあり方について、実践によるアプローチを試みた「地域資源データベース」を活用した地域コミュニケーションデザインに関する実践研究」の成果(二〇〇七年三月)を紹介する。同志社大学大学院総合政策科学研究科新川研究室+山口研究室(以下、新川研究室+山口研究室)、京都大学大学院工学研究科高田・神吉研究室(以下、高田・神吉研究室)、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所による共同研究に、「上町台地からまちを考える会」による運営協力および(株)縁人が京都を舞台に取り組んできた、ローカル・イシュー・ネットワークの発想の展開と技術参画によって実現した「産学地域協働の実践研究プロジェクトである(図1)。

なお、同研究のコーディネーターおよび取りまとめ、山口洋典氏(同志社大学大学院総合政策科学研究科助教)、新川研究室+山口研究室が、主としてガバナンスの観点からの検討・実践を担い、高田・神吉研究室が、主として都心居住支援の観点からの検討・実践を担うとともに、同研究室博士前期課程(当時)の高間勲氏が、修士論文「都心居住支援を目的とした地域資源データベースの開発に関する研究 上町台地境界を対象として」(二〇〇七年二月)を執筆している。本稿では、高間氏の修士論文(図2)および山口氏による同調査研究報告書の一部を抜粋しながら、筆者の私見も若干交えつつ、実践研究の内容を簡単に紹介する。紙幅の都合で断片的な紹介となってしまうことを、あらかじめお詫びしておく。

地域資源データベースと都心居住支援

同プロジェクトは、流動性が高い都心部において、居住者が安心や安全、豊かさを実感できる地域を導くインテグレーションとしての地域資源データベースのあり方について、理論的検討にもとづいて、具体的なシステム開発・データベース構築と検証を行い、持続的な運営へとつないでいく取り組みである。なぜ、地域資源データベースの活用による都心居住支援なのかといえば、地域資源への注目の喚起を入り口に、居住地としての都心への愛着を育み、転じて住まい手に対する都心居住支援を実現していく道筋を探ることができないのではないかと考えるからである。

同プロジェクトに至る前史として、「上町台地からまちを考える会」が先行的に取り組み、二〇〇四年七月から二〇〇六年二月までホームページ上で公開してきた「上町台地・地域資源データベース」の存在がある。同データベースは、「上町台地からまちを考える会」の活動に参加している高田研究室(現高田・神吉研究室)の大学院生尾形氏を中心に、当初はHTML形式で立ち上げられ、その後フリーブログ形式へと改良が加えられてきたものである(図3)。データベースの目的は、「上町台地に存在する人・モノ・情報

研究会メンバー

高田 光雄 (京都大学大学院工学研究科教授、上町台地からまちを考える会理事)
 新川 達郎 (同志社大学大学院総合政策科学研究科教授)
 山口 洋典 (同志社大学大学院総合政策科学研究科助教、
 上町台地からまちを考える会事務局長、應典院主幹)
 安枝 英俊 (京都大学大学院工学研究科助手)
 弘本由香里 (大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所客員研究員、
 上町台地からまちを考える会理事)
 高間 勲 (京都大学大学院工学研究科博士前期課程)
 木村 祐太 (京都大学大学院工学研究科博士前期課程)
 柴田 尚子 (京都大学大学院工学研究科博士前期課程)
 越野 清実 (同志社大学大学院総合政策科学研究科博士前期課程)
 宗田 勝也 (同志社大学大学院総合政策科学研究科博士前期課程)

技術開発パートナー

小原憲太郎、嘉村賢州、永田周一、松田行泰、西尾直樹(いずれも(株)縁人)

運営パートナー

上町台地からまちを考える会

新しい地域ガバナンスを実現するためのデータベースの企画・開発・運営について議論する研究会のワンシーン



図1 「地域資源データベースを活用した地域コミュニケーションデザインに関する実践研究」体制 (所属・役職等は2007年3月当時)

都心居住支援を目的とした地域資源データベースの開発に関する研究
上町台地界隈を対象として



高間 勲
(京都大学大学院工学研究科博士前期課程)

第1章 序論

- 1-1 研究の背景と目的
- 1-2 既往研究
- 1-3 研究の方法と構成

第2章 都心居住における地域資源データベースの意義

- 2-1 地域資源・地域活動
- 2-2 都心居住における地域資源・地域活動の価値
- 2-3 上町台地界隈における地域資源・地域活動
 - 1. 上町台地界隈概要、2. 上町台地界隈における地域資源、3. 上町台地界隈における地域活動
- 2-4 地域資源・地域活動をデータベース化することの意義
 - 1. 上町台地界隈における地域資源データベースの取り組み、2. 地域資源データベースの意義

第3章 都心居住支援ツールとしての地域資源データベースのあり方

- 3-1 都心居住者と地域資源・地域活動の関係
- 3-2 演劇のメタファーを用いた都心居住支援の考察
 - 1. 演劇のメタファーの導入、2. 必要とされる都心居住支援が成立するための要件
- 3-3 地域資源データベースによる都心居住支援のあり方
 - 1. 都心居住支援者に対するインタビュー調査概要、上町台地界隈における都心居住支援、都心居住支援ツールとしての地域資源データベースに望まれるもの

第4章 都心居住支援を目的とした地域資源データベースの開発

- 4-1 イベント情報と地域資源情報
 - 1. イベント情報、2. 地域資源情報、3. イベント情報と地域資源情報の関係性
- 4-2 開発基本要綱
- 4-3 イベント情報のデータベース化
 - 1. 概要、2. イベント情報の閲覧、3. イベント情報の検索、イベント情報の投稿・管理
- 4-4 地域資源のデータベース化
 - 1. 概要、2. 地域資源情報の閲覧、3. 地域資源情報の検索、4. 地域資源情報の投稿・管理
- 4-5 地域資源データベースによる都心居住支援

第5章 地域資源データベースの運用を通じた効果検証

- 5-1 効果検証の目的と方法
- 5-2 イベント情報の検証
- 5-3 地域資源情報の検証
- 5-4 イベント情報と地域資源情報の連携の検証
- 5-5 検証結果の考察

第6章 結論

図2 フィールドワーク中の高間勲氏(写真)と修士論文目次

などの地域資源を網羅したデータベースを作成・公開する事業である。単に資源を網羅するのではなく、実際にその資源を利用して活動および活動主体を同時に掲載することによって利用のイメージを喚起すること、またこれから活動を始めたい都心居住者の窓口としての機能を期待するものである(「尾形」と考えられていた)。

しかし、当初の思いどおりに利用が進んだわけではなく、「これまで運用されてきたデータベースは、考える会からの一方的な情報提供の場であり、定期的な更新のない状態のまま情報量が追加されてきた。そのため、居住者が地域と関わるきっかけになる、という地域資源データベースの持つべき意義を有しておらず、また、支援者(研究者、行政職員、民間企業研究員など)の利用が中心的なニーズと考えられ、一般的な居住者に利用され

るものではなかった。ここに集約された情報を活かし、地域資源データベースの持つべき本来的な価値に向けた改善が望まれる(「高間」と見られる状況にあった。そこで、「上町台地からまちを考える会」の地域資源データベースを、双方向的情報交換システムとして再整備し、人間交流を導き出す、地域ネットワークサービスの新たなモデルを構築する、実践の方向性が見出されることとなったのである。

都心居住支援の三要件

同実践研究プロジェクトの推進役を担った山口氏と高間氏を中心に、研究会およびワーキングでの対話を通して、理論的検討とシステム開発が進められていった。

上町台地地域資源データベース<ver. 2>

稼動年月：2005年11月～
システム：フリープログ(cocolog)

上町台地地域資源データベース<ver. 1>

稼動年月：2004年7月～
システム：html形式

図3 「上町台地地域資源データベース」概要

都心居住支援ツールとしての地域資源データベースのあり方に関する理論的検討の過程では、「演劇」のメタファーを用いることによって、地域資源・地域活動と、そこに関わる支援者と被支援者の関係性を抽出し、都心居住支援の構造を明らかにする（高間 考察が行われた。その結果、次のような要件の抽出に至っている）（高間氏の論文から抜粋）。

都心居住支援として求められることは、直接的、間接的支援者、そして地域資源を基にした活動が常に再創造され続ける循環を生み出すことであるといえる。それは、さらに演劇でいえば、役者と裏方によってつむぎ出された作品を観客が鑑賞し、鑑賞を通じた反応がその演じ手、もしくはその劇団に返ってくることで、よってさらなる作品が生み出されることと同様の構造である。やがてその観客の中から新たな役者が出る可能性もあり、そして演劇の世界に興味・関心を持ち、裏方として演劇の舞台を支えていく人材が生まれるのと同様に、最初は何気なく地域のイベントに参加していた居住者達が、より新しい作品を生み出す担い手になることも想定される（図4・図5）。

以上の考察から、必要とされる都心居住支援として、「演劇」への参加支援、「裏方」「プロデューサー」の誕生支援、「裏方」「プロデューサー」の成長支援の三点が抽出された。

（中略）
演劇のメタファーを用いて説明した地域資源データベースのあり方を次のようにまとめる。具体的には、「地域活動への参加促進」、「地域活動の担い手を生む」、「地域活動の担い手が育つ」、の三点が都心居住支援ツールとしての地域資源データベースに望ま

れる、ということである。

こうして、演劇のメタファーを用いることによって抽出された、都心居住支援の三要件を構造化する地域資源データベースのあり方が模索されることとなった。

イベント情報と地域資源情報の連携

まず、都心居住支援の第一段階にあたる「地域活動への参加促進」を実現するためのインターフェースとして着目することとなったのが、イベント情報である。「最初は何気なく参加していた居住者の意識を高め、次の担い手を生み出すことにつながる可能性を持つ」（中略）地域に散在するイベント情報を集約し、検索可能な形にしたデータベースは、支援者が居住者に働きかける場となり、反対に、居住者の側からの声（歓声や劇評）が集まる場となることも可能であり、そうしたやりとりが日々収集されていくことで、地域資源を基にした活動が常に再創造され続ける循環を生み出すことが可能であると考えられる（高間）ためである。

さらに、イベント情報に関連する地域資源情報とイベント情報の相乗作用への気づきが生まれる。「イベント情報のデータベースに多様な形で埋め込まれた地域資源に一つ一つ解説を添えていくことで、イベントへの参加のきっかけを生み出すのみならず、イベントへの参加を通じて得た地域に対する興味関心を深める機会として地域資源情報を利用することが期待される。それは、イベント参加者が担い手へと育っていくための支援となるだろう。さらに、イベント情報と地域資源情報という二面構造を持つデータベースを作成することで、両情報利用者の行き来が生じ、普段は交わらないはずの人たちが交わ

演劇のメタファー	都心居住
プロデューサーが劇場に役者、観客を引き寄せる	直接的支援者が、地域資源・地域活動に関わるきっかけを提供することで、居住者が地域と関わりを持つようになり、また非居住者からの注目を集めるようになる
裏方の存在が作品を成立させる	間接的支援者による支援が、地域に暮らす意味を居住者達が十分に感じ取り、ならびに活動家たちがさらなる活動を展開することによって地域の魅力が高まることにつながる
役者が観客としての意識を持つ	居住者が地域に暮らす意味を十分に感じ取る
観客が作品を鑑賞する	非居住者が地域の魅力を知る
観客が演じ手、劇団に作品鑑賞の反応を返す	非居住者が地域の活動に対し、意見・感想を伝える（書き込む）

図4 演劇のアナロジー：各主体の役割

演劇のメタファー	都心居住
作品を観た観客が演劇の世界に興味・関心を持ち、役者として舞台にたつようになる	非居住者が、地域の魅力に惹かれ、居住者になっていく
作品を観た観客が演劇の世界に興味・関心を持ち、裏方として演劇の舞台を支えていく	非居住者が、地域の魅力に惹かれ、間接的支援者になっていく
作品を観た観客がいてもたってもいられず、プロデューサーとして演劇を創る側になる	非居住者が、地域の魅力に惹かれ、直接的支援者になっていく
役者が観客の反応を受け、裏方として演劇の舞台を支えていく	居住者が、地域に暮らす意味を十分に感じ取り、自らが間接的支援者になっていく
役者が観客の反応を受け、プロデューサーとして演劇を創る側になる	居住者が、地域に暮らす意味を十分に感じ取り、自らが直接的支援者になっていく
裏方が観客の反応を受け、プロデューサーとして演劇を創る側になる	間接的支援者が、地域資源・地域活動に対する思いを強め、自らが直接的支援者になっていく
裏方が観客の反応を受け、プロデューサーにさらなる支援をするようになる	間接的支援者が、地域資源・地域活動に対する思いを強め、直接的支援者へのさらなる支援を展開する
プロデューサーが観客の反応を受け、新たな作品づくりにとりかかる	直接的支援者が、地域資源・地域活動に対する思いを強め、さらなる活動を展開する

図5 演劇のアナロジー：主体間の関係から生まれる主体の変化

る場ともなる「高間」というわけである。

こうして、イベント情報のデータベースを サイドA に、地域資源情報のデータベースを サイドB として、両者をキーワードによって結びつける、都心居住支援のための地域資源データベースのフレームが誕生することとなった。サイドAは「上町台地 cotocoto(コトコト)」、サイドBは「上町台地 cotocoto+(コトコト・プラス)」と名づけられた。

名前の由来は、上町台地界隈の社会的、文化的、歴史的な魅力に着目し、多彩に取り組まれているイベント情報を集約することで、そつしたイベントへの参加者と企画者の出会いをおとして、上町台地界隈への愛着と、さらなる魅力が高まるように、『出来事』と『物事』と『ト』を結びつけたものであるという意図を持つ。サイドBに『+』と付けた理由は、イベントのデータベース(サイドA)が都心居住を支援するものとなり、さらにその効果を高め、支援者(特に間接的支援者)にとつても利用価値のあるものとする必要があるという意図からである(山口)。

上町台地・cotocoto(+)の開発

「上町台地 cotocoto(uemachi.cotocoto.jp)」と「上町台地 cotocoto+(uemachi.cotocoto.jp/plus)」の開発の基本要綱は次のとおりである(高間氏の論文に山口氏が加筆修正をした報告書から抜粋)。

システムモデル

本研究では、開発意図に近い形で運用されている既存のシステムをベースに開発を進めている。イベントデータベースに関しては、(株)縁人が開発・運営を行う

イベントポータルサイト「京都 cotocoto(旧 kenshu.org)」を採用した。その特徴は、イベントに特化した情報収集のシステムの中で、提供する側と利用する側の視点が考慮されていることである。また、地域資源情報に関しては「WordPress」を採用した。「WordPress」はWEBコンテンツを管理するシステム(CMS)であり、地域資源データベースの管理だけでなくイベントデータベースとの連携にも適している。両サイトの連携概念を図6に示す。

開発協力

システム構築に関する技術面の協力は、(株)縁人に依頼された。筆者らは、(株)縁人と、開発に関する意識共有のための開発会議を繰り返し行ってきた。今後も継続して技術面のサポートを依頼していくため、インターフェースに関わる問題は(株)縁人からの提案を協議によって採用するという形をとった。すなわち、協働開発が進められたということである。

開発日程

筆者らと(株)縁人は、二〇〇六年九月二三日にディスカッションの第一回目を行い、その後隔週でのミーティングを重ねてきた。本システムは、二〇〇七年一月二〇日に仮稼働、一月二六日から 版の本稼働(基本システムの搭載)を開始している。今後も補助的な機能が随時搭載されていく予定である。

運営体制

システム全体に対する管理・運営を、上町台地からまちを考える会」が担い、技術面のサポートを(株)縁人が担っていくこととした。また、システムの発展に伴い、新たな人的・物的協力が必要となる場合は、「上町台地からまちを考える会」の意思決定の下で随時対応していくこととした。

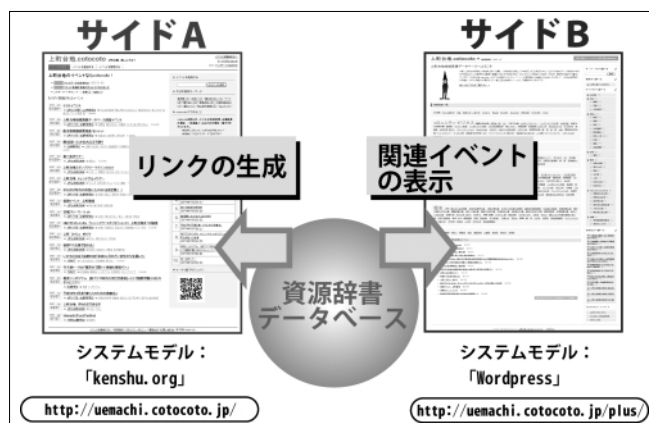


図6 システム概念図

イベント情報ページの特徴

イベント情報のデータベースサイドA「上町台地.cotocoto」には、「イベント情報の登録」、「イベント情報の管理」、「イベント情報の検索」、「イベント情報の閲覧」、「イベントへの申し込み」の機能が盛り込まれて、それぞれに利用者の意識と行動を喚起する工夫が凝らされている(図7・図8)。ここでは、その中から「イベント情報の閲覧」機能をとおしてシステムの特徴を紹介しておくこととする(高間氏の論文に山口氏が加筆修正をした報告書から抜粋)。

イベント情報ページで閲覧できるのは、「イベント名」、「告知文」、「基礎情報」、「キーワード(リンク)」、「関連地域資源(リンク)」、「コメント」の六点である。イベント名、基礎情報(主催者・団体名、開催日程、開催場所、参加費、定員)は、閲覧者がイベント情報を知りたいことを目的とする。告知文には開催場所や基礎情報以外に、イベントをより魅力的に紹介するための情報が書かれ、投稿者の工夫によって、上町台地界隈が魅力的に語られる場となる。同様に、キーワードもまた、主催者によって魅力が語られるものであり、キーワードからは、他のイベントへの興味の広がりを生み出すことにもつながる。さらに、コメント欄に、主催者や主催者の応援者によるコメントが書かれることで、より臨場感のある情報ページとなり、閲覧者を引きつける。そして、イベント後にイベント参加者の声が集まる場所として、イベント主催者と参加者の交流の場ともなる。(中略)

目的	手段	都心居住支援要件		
		I	II	III
1. イベント情報を知る	I: ①イベント名 I: ③基礎情報 S: ①一覧検索	○		
2. 地域への興味・関心の創出、拡張	S: ②直接入力検索 I: ④告知文 I: ④キーワード(リンク) S: ③キーワード検索 S: 【キーワード検索ページ】	○		
3. 参加の促進(※補助的機能)	I: 【参加申込みフォーム】 I: 【参加保留ボタン】 I: 【QRコード】 S: 【QRコード】	○		
4. 支援者と被支援者の交流	S: ④アクセス数検索 I: ⑥コメント	○		
5. 支援者による居住者への働きかけ	Sh: ①イベント名投稿・編集 Sh: ②告知文投稿・編集 Sh: ③基礎情報投稿・編集 Sh: ④キーワード選択・追加 Sh: ⑤参加者管理 Sh: ⑥広報効果閲覧 Sh: 【クチコミ投稿】			○
6. 支援者による情報の蓄積	+Sh: ①地域資源名投稿・編集 +Sh: ②解説文投稿・編集 +Sh: ③写真投稿・編集 +Sh: ④地図添付(Google map) +Sh: ⑤カテゴリ選択・追加 +Sh: ⑥記述者選択			○
7. 支援者による投稿の促進(※補助的機能)	+I: ⑥記述者ID +I: 【編集ボタン(リンク)】 +I: 【イベント名一覧(RSS)】 +I: ⑦コメント			○
8. 投稿者と閲覧者の交流	+I: ⑦コメント			○
9. 参加者の地域への興味・関心の創出	I: ③関連地域資源(リンク)	○	○	○
10. 地域への興味・関心の深化	+I: ①地域資源名 +I: ②解説文 +I: ③写真 +I: ④地図(Google map)			○
11. 地域への興味・関心の創出、拡張	+I: ⑤関連カテゴリ(リンク) +S: ①一覧検索 +S: ②直接入力検索 +S: ③キーワード検索 +S: ④地区カテゴリ検索			○

記号 I: :cotocoto「Interest」画面 S: :cotocoto「Search」画面 Sh: :cotocoto「Search」画面
+I: :cotocoto+「Interest」画面 +S: :cotocoto+「Search」画面 +Sh: :cotocoto+「Search」画面

都心居住支援要件 I イベントへの参加促進 II 担い手を生む III 担い手が育つ

図8 都心居住支援を目的とした地域資源データベースの構造

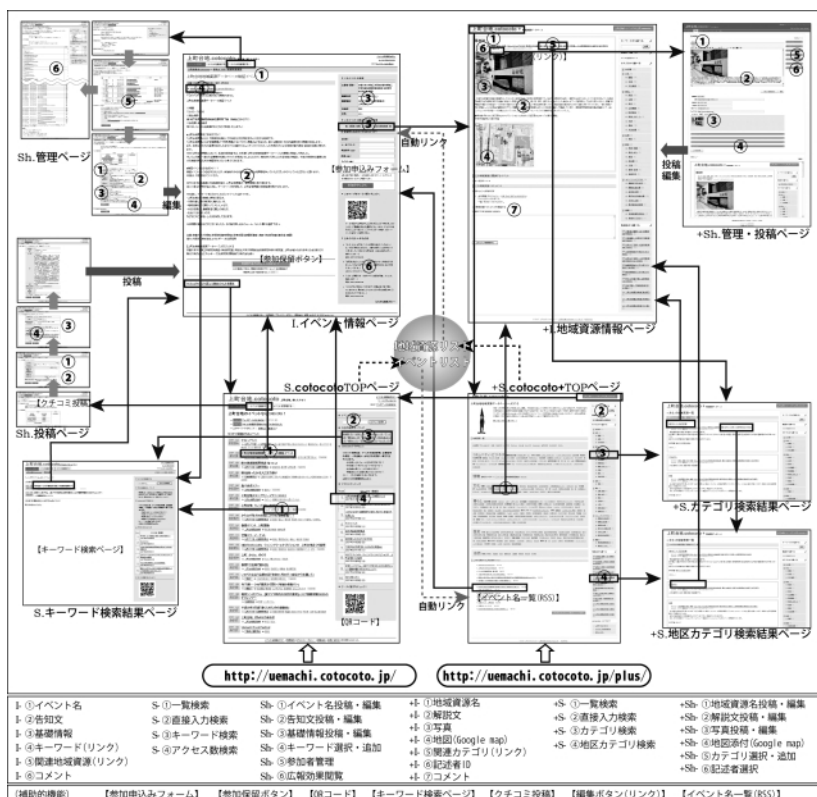


図7 「上町台地.cotocoto」概要/機能一覧

イベントに登場する地域資源を知りたいという欲求が閲覧者の中に生まれることが想定される。そこで、イベント情報ページ内に登場した関連地域資源を一覧で表示し、地域資源情報ページ(「上町台地 cotocoto+」)に移動することができるようにした。それによって、何気なくイベントに参加した参加者が、地域資源情報を知り、さらなるイベントへの参加や、地域資源へのイベント外のアクセス、あるいは地域資源情報を知ることによる担い手への発展などといった効果が期待される。それはまた、イベント主催者にとっても、イベントを一過性のものでなく、地域資源に根ざした、地域にとつて意味のあるものだということを認識する機会ともなり、新たな活動への発展が期待される。

またイベント情報ページには、携帯閲覧用のQRコード、イベントへの参加申し込みフォーム、参加保留ボタンといった機能が盛り込まれている。(後略)

地域資源情報ページの特徴

一方、地域資源情報のデータベース(サイドB)、「上町台地 cotocoto+」は、既存の「上町台地地域資源データベース」のデータを「WordPress」のシステムに移行し、情報の投稿・編集を複数人で管理可能にしたものである(図7・図8)。ここでは「地域資源情報の閲覧」機能を通してシステムの特徴を紹介しておくこととする(高間氏の論文に山口氏が加筆修正をした報告書から抜粋)。

地域資源情報ページで閲覧できるのは、「地域資源名」、「解説文」、「写真」、「地図」、「関連カテゴリ」、「記述者ID」、「コメント」の七点である。(中略)

以前のものにはなかった情報としては、Google mapによる地図表示を設けた。視覚的に位置を把握できることにより、イベント参加者が、参加したイベントの位置を再認識する機会となり、その作業は地域との関係を取り結ぶ上で重要であると考えられる。

地域資源に関連するカテゴリはページ上部に表示される。ある資源に関わった人が、別の資源に興味・関心を持ち、新たに関わりを持つことを想定している。そのため、各資源には、一つのカテゴリに属するのではなく、関連する複数のカテゴリを与えた。

さらに、上部の関連カテゴリ表示の下には、記述者IDが表示されている。これはこの情報ページが更新されていくことを示し、また、複数の人によって情報が更新されていることを示すものである。(中略) 現在は、筆者らの研究室のみで作成されているため、意図どおりには機能していないが、地域資源の管理者、あるいは関連する活動の運営者などが更新に関わっていくことによって、情報としての価値を高めるだけでなく、地域資源に関わる人たちが集う場となっていくと考えられ、今後地域内で情報提供者を獲得していくことがさらなる発展につながることを想定している。(後略)

有効性・妥当性の検証と課題

開始はしたものの、発展途上の「上町台地 cotocoto」と「上町台地 cotocoto+」である。稼働まもない段階で、実際の居住者による利用実態や効果を検証することは不可能だが、データベースシステムの機能の有効性・妥当性に関する検証を試みている。

「目的の一つはイベント情報のデータベースが、地域と関わる入り口として有効であるかを検証する。その際、

新規居住者や非居住者といった地域と関わりをほとんど持たない人たちの参加につながることを検証することで、元々抱いていた興味・関心とは異なる部分からの地域への興味・関心の萌芽を確認する。また、二つ目として、イベントに参加することと地域資源情報を利用することの連携がもたらす効果を検証する。すなわちシステムの全体像としての妥当性の検証である^(高間)

検証イベントは、まち歩きとその後のデータベース利用という形式で行われた。紙幅の都合で具体的な検証のプロセスや結果の詳細説明は省略するが、地域に関わる入り口としてのイベント情報のデータベース(上町台地・cotocoto)の有効性が確認され、イベント情報のポータルサイトに地域資源情報を多様な形で埋め込み解説していく統合型のデータベースの妥当性とともに、担い手の誕生や成長につながる可能性も認められている。

一方、検証イベントを通して明らかとなった課題を受け、「各資源情報ページに基礎情報欄を設ける」、「各地域資源ページに関連イベント情報を表示する」、「地図検索ページから地区カテゴリー一覧への移動」、「選択項目としての地域資源名を用意」といったシステムの改善も行っている。が、カテゴリーのあり方やビジュアルな検索方法のあり方、情報内容の充実などの課題は引き続き残されている。また、システムの構築ができたとはいえ、その運用方法についてはまだ検討途上であり、地域ネットワークキングサービスの新たなモデルとなるには、多くの課題を乗り越えていかねばならない。

第一一話の終わりに

今後、持続的運営へとつないでいくプロセスのなかでこそ、同データベースが産学地域協働のプロジェクトと

して取り組まれた意義がいつそう発揮されていくべきであろう。同データベースは、バーチャル・コミュニケーションをつくることを目的としているものではなく、あくまでもまちの中のリアルな場と人をつないでいくことによつて、新たな都心居住の主体と場を育むことを目的としている。いわば、ゆるやかな地域ガバナンスの仕掛けである。「『地域ガバナンス』とは、新川らによれば、『多様な住民を担い手とした多元的でしかも住民の水平的なネットワーク』と定義される(特定非営利活動法人まちづくり政策フォーラム、二〇〇六)」、山口)ものであり、「『上町台地・cotocoto』と『上町台地・cotocoto+』には、地域のお宝を集約して物理的な環境への着目をかき立てることよりも、むしろよい関係をつくっていく道具になることができるかどうか問われている(山口)といえる。

その役割を果たしていくには、生活に身近な都心居住支援のためのデータベースとしての利用者・担い手の支持と広がりが必要である。研究会の議論では今後に向けて次のようなポイントが確認された。新・旧住民それぞれの視点、あるいは上町台地に暮らしてはいるもの、まちづくりに参加しない人々の視点、さらにはデジタル・ダイバイドの現実などを意識しながら、ポータリティ(窓口性)やアクセシビリティ(接続可能性)を高めていく知恵が求められる。例えば、現在のサイドAとサイドBの二面からなる構造に、日常の魅力を物語るサイドCや、地域の知恵を集約するサイドDなどを加え、幅を広げていくことも、今後の展開の可能性の一つだろう。誰もがまちの物語の立て役者であることを、まちを舞台に体现するきっかけを得る身近な道具になり得るかどうかが、地域資源データベースを活用した地域コミュニケーションデザインの鍵といえそうだ。

(大阪ガスエネルギー・文化研究所客員研究員)